

小学校体育における水泳授業の実態に関する研究

—— 目標・内容・方法に着目した課題の描出 ——

A Research on the Actual Conditions of Elementary School Swimming Lessons

: Focusing on Objectives, Contents, and Methods

佐藤 友音

Tomonari SATO

(東大阪市立西堤小学校)

池田 拓人

Takuto IKEDA

(和歌山大学教育学部)

2019年10月11日受理

要旨

本研究では、学習指導要領における「水泳」の歴史的変遷について概観したうえで、現在の小学校現場で行われている水泳授業の実態を授業の目標・内容・方法の観点から、先行研究の検討及び小学校教員へのアンケート調査をもとに水泳授業の課題を明らかにすることを目的とした。その結果、水泳授業の特殊性という要因から様々な課題があることが明らかとなった。さらに、その課題に対して、「早い段階から泳法指導を行う」という授業を行うのではなく、「泳ぐことの楽しさを味わうために、段階に合わせた授業を行う」ことが重要であることも明らかとなった。

キーワード：小学校体育、水泳授業、指導法、学習指導要領、泳法指導

1. はじめに

水泳授業は、体育の他の単元とは異なり、水中という特殊な環境で行われる。夏季の短期に行われ、天候に左右されることから、学びに系統性を持たせることが難しい単元でもある。寺本ら(2017)によると、「学習指導要領の内容に沿った水泳授業を行っている」という質問に対して、「そう思う」と答えた教員は61名中15名という少ない結果であった。さらに、水泳授業の内容においても、「水泳=泳法」という考え方により、学習指導要領の例示では小学校高学年に泳法指導が位置付けられているにも関わらず、低・中学年からクロールや平泳ぎといった泳法を指導している現状があると指摘している。これらの原因として、三輪ら(2010)は、「水泳授業は時限数が限られているため、教師はなんとか泳げるようにしたいという気持ちから、早く『水泳』に取りかかろうとしてしまいがちである。」と述べている。さらに、松原ら(2014)によると、「戦後における水泳授業の目標が『技能習得』から、『運動(水泳)の楽しさに触れる』と変化しているにもかかわらず、実際の教育現場においては、現在もその変化は見られないのではないか。」と述べている。

水泳授業においてこのような状況が考えられるなか、今般改訂された新学習指導要領によると、児童の主体性と学びの過程を重視し、生涯スポーツにつながる体育授業が目指されているが、実際の学校現場の水泳授業では、そういった観点からの授業改善が行われてい

ない可能性が高いことが推測される。

そこで本研究では、学習指導要領における「水泳」の歴史的変遷について概観したうえで、現在の小学校現場で行われている水泳授業の実態を、授業の目標・内容・方法の観点から、先行研究の検討及び小学校教員へのアンケート調査をもとに水泳授業の課題を明らかにすることを目的とする。

2. 学習指導要領における水泳領域の変遷

現行の小学校学習指導要領において、水泳は体育科の1つの領域として重要な位置付けにあるが、1958年以前の学習指導要領においては、現在とは異なり独立した領域として示されていなかった。これについて1958年改訂の学習指導要領には、「適当な水泳場がなく、水泳を実施することができない場合には、水泳を欠くことができる。その場合は、水泳に割り当てられた時数は、他の領域の内容に割り当てる。」と説明されている。当時の学習指導要領には日本泳法も明記されており、まだ学校にプールが十分に整備されていなかった当時は、海や川等の自然水域、あるいはそれを利用して整備された水泳場において授業が行われていた。

ところが、1955年には、多くの児童生徒が犠牲となった「紫雲丸沈没事故」の発生により、学校教員に対する水泳指導能力の必要性と、児童生徒には自らの生命を保持し得るだけの水泳能力の獲得が求められるようになったのである。また当時、文部省と日本水泳連

盟による全国各地での学校教員への水泳指導講習会が軌道に乗ってきたことや、教員養成系大学への水泳指導の奨励などが成果を見せ始めたこと、その後の高度経済成長期を経たことで、学校プールの本格建設の可能性が見えてきたことにより、1968年改訂学習指導要領において、水泳が体育科の中の一つの独立した領域として明記されるようになった(土居ら、2009)。

1977年改訂学習指導要領では、「生涯スポーツ」「楽しい体育」が登場し、運動の機能的特性の重視、運動の手段論から目的・内容論への転換等が目指された(松原ら、2014)。これは現行の学習指導要領(2008年改訂)においても、「競争」や「記録への挑戦」、「心地よく泳いだり泳ぐ距離を伸ばしたりする」といった「水泳の楽しさを味わう」という目標に受け継がれている。

3. 水泳の学習目標・内容・方法に関する議論について

では現在、小学校体育で行われている水泳授業について、先行研究において議論されてきた問題を取り上げ、授業の目標・内容・方法の観点から整理していくこととする。

3.1. 目標に関する議論

先述したように、水泳授業の「目標」は泳法習得以外にも生涯スポーツ、競争や記録への挑戦等、様々な目標があるにもかかわらず、「泳法習得」「泳法指導」に終始している問題がある。浜上(2017)はそれに加えて、「学校体育で習得すべき学力には技能のほか認識、社会的行動に関わる内容が設定されており、さらには今後の教育課程全体で育成が目指される新しい資質・能力の考え方も加味されるべきである。」と述べている。

一方で、「安全水泳」の観点から松井(2011)は、「溺水防止・水中安全力確保の目的で、国策として発展してきた学校水泳はいつの間にかその本来の目的から逸れている」と問題を指摘し、「今後は自然環境での水泳を想定した動きの要素をいかに取り入れ、本当に泳げることを保証するだけでなく、身体と水に関する理論と文化を理解し、実践し、それを継承させていくための教育」を目指すべきだと述べている。また、このほかにも生涯スポーツを目指す水泳授業、あるいは遠泳や臨海学校の授業研究等も報告されている。

3.2. 内容に関する議論

水泳授業の「内容」については、授業の中で取り扱う種目についての議論が多い。松原ら(2014)によると、これまでの水泳授業では主にクロールや平泳ぎによる「競技水泳」を取り扱う割合が非常に高いことが明らかになっている。椿本(2004)は「水泳教育は、『人の人生を守るという、崇高な使命』をもち、その目標達成のための方法として、これまで長い間、より速く泳ぐ

競泳的指導に頼ってきている。」と現状を指摘している。さらに、「競泳の泳法指導は、泳ぐタイムや距離が明確に分かり、相対的評価が容易に分かる利点があり、また速く泳げることは、水中での自己保全能力も高いと考えられてきたから」(椿本、2004)と原因を述べている。

一方で、「生涯スポーツを志向する体育学習を考えるにあたっては、児童の能力、興味・関心、目標、ライフスタイルに応じて多種多様なスポーツ種目を取り上げる必要がある…(中略)…水泳についても、『マリンスポーツ』や『水中ウォーキング』などを人々が享受するようになってきており、水泳授業においても多種多様な水泳種目を取り扱うことを保証する必要があるのではないか。」(松原ら、2014)と指摘されており、競泳中心となっている授業内容の現状について批判的に捉えられている。

また松井(2017)は、新学習指導要領(2017年改訂)の高学年の水泳運動に「安全確保につながる運動」の内容が追加されたことに対応させて、安全を確保するための諸技能(ポビング・浮き身・立ち泳ぎ等)を着衣状態で行う「着衣水泳」を行う水泳授業も必要であると述べている。

3.3. 方法に関する議論

水泳授業の「方法」については、様々な授業実践が報告されており、「泳法」が位置付いている高学年よりも前段階である低学年の「水遊び」、中学年の「浮いて進む運動」「もぐる・浮く運動」に関する実践研究などが数多く見られた。

3.3.1. 「呼吸をしながらの初歩的な泳ぎ」に焦点を当てた指導

大場(2016)は、「中学年の『浮く運動・泳ぐ運動』では、クロールや平泳ぎへつながる練習として腕動作(ストローク)や脚動作(キック)ばかりに時間を使いがちである。」と指摘し、「子どもたちの実態に合った初歩的な泳ぎ(どんな形であっても浮いて呼吸をしながら進める泳力)を身につける」ことを目指すべきだと述べている。

また、牧野(2011)は一般的な低学年の呼吸の指導における問題点に、「水中で鼻から息を出す」ことがあると述べている。これによって、鼻から息を出し切った後に口から息を吸うのであるが、水を鼻から吸い込んでしまう子どもがいる。そこで、「口から吸って、水面上で口から一気に出す」という呼吸法が教師の常識となれば、習熟度も上がると改善案を提示している。

ほかにも、鈴木(2016)は「呼吸をしながらの初歩的な泳ぎ」に焦点を当て、具体的な指導法として「牽引練習法」を挙げている。「牽引練習法」とは、4名一組となり、牽引される者1名、牽引する者3名で行われ、

いろいろな浮き身の姿勢をとりながらロープで水中を牽引される中で、「水平に浮く感じ」と「水の抵抗を受ける感じ」を経験できる指導法である。これによって、子どもたちのけ伸びの姿勢が抵抗の少ない姿勢に改善されたと述べている。

3.3.2. 「背泳ぎ」に焦点を当てた指導

浜上(2017)は、初心者が自力で25m泳ぎ切するための最も簡単な泳法に「背泳ぎ」を挙げ、「クロール」「平泳ぎ」の前に「背泳ぎ」を指導することの効果について言及している。「背浮き」や「背泳ぎ」で培った「浮く感覚」が他の泳法にスムーズに移行するために効果的であり、リラックスして「背浮き」ができる児童はクロールの最大の関門である「横方向の呼吸動作」が習得しやすくなると述べている。

さらに、背泳ぎの学習指導要領の中における配列を見ると、「背浮き」や「ばた足」など「背泳ぎ習得のキーとなる技能」が小学校中学年の指導内容に位置づけられているにもかかわらず、背泳ぎの直接的な指導が中学校に先送りになっていることを指摘し、小学校中学年でも「背浮きばた足」が十分に習得可能であることは実践によって確認済みとして結論付けている。

また、浜上ら(2015)は、背泳ぎとクロールの指導の順序が泳法の習熟度に及ぼす影響を明らかにする調査を大学生を対象として行った。その結果、「背泳ぎから習得した方が学びやすい」という意見が多く見られ、主な理由として、背泳ぎを泳ぐ際に呼吸動作を必要としないこと、姿勢を意識しながら泳ぐことができることが挙げられた。吉松(2011)も、背浮きの状態で移動しながら呼吸を体感することに慣れてくれば、子どもは自然に手や足を使って自分で進むようになることを指摘している。

3.3.3. 「浮くこと」に焦点を当てた指導

篠原(2016)は授業実践において、単元前半で「浮く運動」、後半に「泳ぐ運動」を行ったところ、「浮く運動」によって水中で安全に安心して活動できる水泳能力を身に付けた児童は、特別な泳法指導を行わなくても、自身の最長泳距離を伸ばすことができたと述べている。これについて、浮漂ができる(浮く感覚を身につける)と落ち着いてストロークができ、スムーズに進むことができるので、結果として水中で安心して活動できることが泳ぐことにつながったと結論づけている。

また、本間(2011)も高橋メソッド(2009)「伏し浮き(背浮き)→伏し浮きから立つ→床を蹴って背浮き→壁を蹴って伏し浮き(背浮き)」を提示し、段階的な指導を行うことで背浮きと伏し浮きの一連の動きができるようになると、簡単に泳法練習に移行できると述べている。

さらに、成家ら(2013)も、「感覚的アプローチ」によ

る実践の中で、浮く感覚を習得することは、水中での動作を知覚するのに効果的であると述べている。三輪(2011)は、「3、4年生の『浮く・泳ぐ運動』において、『け伸び』が最重要基本動作であり、『クロール』の全ての動作は『け伸び』に付随したのと言ってもよい。」と述べ、「け伸び」の重要性について言及している。

他にも、荒木(1995)は「ドル平泳法」を基礎泳法とする水泳指導の有効性を示しており、「ドル平泳法は、リラクゼーションを強調した、浮力・揚力を活かした水平な泳ぎであるから、バタ足などからの指導に比較し、緊張度と疲労感のはるかに少ないので、継続した練習が可能で、水泳の技能定着が早くなる。」と述べている。

3.3.4. 「競泳」ではない新たな指導

先述したように先行研究において、「競泳」だけではない新たな種目を採用した授業研究が行われている。柴田(2004)は「プールにはコースロープやコースラインがあることから、水面をまっすぐ泳ぐことが一般化されているが、時にはコースロープを取り外して全域を泳力差にかかわらず全員で縦横に活用する発想もあってよい」と述べており、その例として音楽などに合わせた水中運動や、水中ボールゲーム、様々な運動を組み合わせたサーキット泳などを挙げている。ここからは、例に示した水泳授業に関する実践研究を紹介する。

水中運動とは、水を利用した活動の総称のことであり、水泳、水中歩行、水中ストレッチ、アクアビクス、水中リラクゼーションなどがある。浮力、抵抗、水圧、水温、水流などの水の特性を利用して、正常な身体機能の維持、改善、増進、回復を図る運動である。田邊ら(2015)は、競泳中心の授業を見直す取り組みとして水中運動を取り入れた授業が提案されていることについて、「それは、流れを作ることや腕で水をかいて進むことにより水の特性を自然に体感できることなど、泳げなくても水を楽しむことができ、全身で感覚的に水と慣れ親しみ、自然な呼吸を体感できるからである」と述べている。

さらに、田邊ら(2015)は、吉松(2011)が「小学校の水泳授業には、水圧がかかった状態での呼吸獲得が重要であり、水慣れ段階では水の中で声を出しながら遊ぶことが有効である」と報告していることを紹介し、例として水中エアロビクスの有用性を示している。

鎌倉(2016)は、4年生の水泳の授業において、従来行われてきた競泳的指導による技術志向型の授業ではなく、「遊び」の要素を取り入れた「水球風ゲーム」という水中でのボール運動を通して、子どもが水の特性や楽しさを感じ取り、結果として児童が主体的に泳ぎに必要な動きを身につけることができるかの検証を行

った。研究の結果、児童はボールを保持するために競って泳いだり、ボールに向かって飛び込んだりしながら夢中に運動に取り組むことで、体全体で水の特性を感じ取ることができたと述べている。また、陸上に比べて転倒したときの痛さや怖さが無いことから、ダイナミックな動きを誘発することにつながった。さらに、水泳が苦手な児童も、ボール運動を取り入れた種目のため、楽しんで活動に取り組むことができたことが、授業後の感想から確認できたと述べている。

このように、たくさんの実践研究が報告されているが、寺本ら(2017)は「指導にあたる教員も必ずしも水泳に関する専門知識を有しているわけではない」と述べており、教員の指導力不足にも問題があることが推測される。そこで、小学校教員に向けた水泳授業のアンケート調査において、水泳授業における現状の課題を明らかにしていく。

4. 小学校における水泳授業の実態調査

4.1. 調査対象及び方法

アンケート調査については、W市の公立小学校に在籍する教員を対象とし、12校から169名(男性72名・女性97名、教職歴11.9±10.31年)の回答を得た。調査は2018年12月3日～27日の期間において実施した。

調査内容は、「教員個人のプロフィール」「実践した水泳授業について」等の4分野で構成し、質問項目は計43項目であった。特に、「実践した水泳授業について」は具体内容を明らかにするために、授業の「目標」「内容」「方法」の3要素についての質問を行った。質問内容については、寺本ら(2017)や佐藤ら(2018)の実態調査で用いられたアンケートを参考に作成した。

4.2. 結果及び考察

4.2.1. 対象者の属性と水泳授業の実施状況

対象者の「教職歴」については、表1からも分かるように最も多かったのは教職歴1～10年の若い教員であったことから、小学校現場では若い教員が急激に増えてきていることが分かる。一方で、おおむね30～40歳代の中堅教員が少ないことも課題の一つであると言えよう。若手教員の指導に当たり、お手本となる存在が学校現場に少ないことや、学校の中核を担う教員が少ないことから、授業改善にも少なからず影響を与えていることが考えられる。

表1 対象者の教職歴内訳

教職年数	割合
1～10年	61.3%
11～20年	16.7%
21～30年	14.9%
31年以上	7.1%

水泳授業における「授業あたりの参加教員数」の結果については、表2に示したとおり最も多かったのは「3人」の56.2%であった。水泳授業は、複数学級により合同で行われる場合がほとんどであり、また学級担任に加えて別の教員が指導に入ることも多いことがわかる。

一方で、「授業あたりの指導児童数」の結果(表3参照)では、データのばらつきが見られた。「91人以上」で行われる水泳授業では、一度に全ての児童がプールに入ることが困難であるうえに、水中よりもプールサイドにいる時間がさらに長くなってしまいうえ、教員の数を増やしたとしても技能の獲得が難しいままになってしまふことが考えられる。児童数が多いとプール内での事故が発生する確率が高まったり、教育効果が下がることも考えられるので、仮にプールの時間数を少なくしても、適切な児童数で授業を行う等の対策も必要になると考えられる。

表2 授業あたりの参加教員数

参加する教員数	割合
1人	1.8%
2人	0.6%
3人	56.2%
4人以上	40.2%
無回答	1.8%

表3 授業あたりの指導児童数

指導する児童数	割合
1～30人	4.1%
31～60人	37.9%
61～90人	29.0%
91人以上	27.2%
無回答	1.8%

表2～3の結果を総合すると、教員1人につき概ね20～30人の児童を指導しなくてはならない現状がある。プールという特殊な環境下で行われる水泳授業において、20～30人を監視し、全ての児童に合った適切な指導を行うのは限りなく困難であるため、教員1人あたりの負担を減らすことが必要である。水中で行う運動であるため、直接的に生命にも関わる可能性があるため、指導にあたる教員のほかに、監視にあたる教員も必要である。

4.2.2. 水泳授業の目標について

「水泳授業の目標」(表4参照)は複数回答項目である。水泳授業の目標設定として最も多かったのは、「泳ぐ距離・浮いている時間を伸ばす(63.9%)」であることが分かった。また、1977年から学習指導要領に示されている「生涯学習」という目標が最も低い結果(10.1%)となった。

表4 水泳授業の目標設定（全体）

目標	割合
泳ぐ距離・浮いている時間を延ばす	63.9%
泳法の習得	56.8%
命を守るため	46.7%
記録を達成する	26.0%
その他	17.8%
生涯学習	10.1%

また、担任学年(低・中・高学年)別に水泳授業の目標を見ていくと、「中学年の水泳授業の目標」(表5参照)において課題が明らかになった。結果は、「泳ぐ距離・浮いている時間を延ばす」が81.3%と最も高い割合であったが、「泳法習得」も72.9%と高い割合を示し、泳法の前段階の基礎・基本が身につけていないまま、泳法指導が行われている現状の課題が推測される。

表5 水泳授業の目標設定（中学年）

目標	割合
泳ぐ距離・浮いている時間を延ばす	81.3%
泳法の習得	72.9%
命を守るため	54.2%
記録を達成する	27.1%
生涯学習	8.3%
その他	6.3%

さらに、「学習指導要領の目標に沿った授業を行っている」(表6参照)という質問項目において、「そう思う」「ややそう思う」と答えた教員を合わせると88.7%という結果であったことから、「中学年から泳法指導」が、「学習指導要領に沿っている」と考えている教員が存在しており、学習指導要領の中身を理解していない教員がいるという大きな課題が示唆された。

表6 学習指導要領の目標に沿った授業をしている

そう思わない	あまり そう思わない	ややそう思う	そう思う
1.2%	10.1%	56.2%	32.5%

次に、「あなたが考える理想の水泳授業を実現できていますか」と質問した結果(表7参照)について、「いいえ」と答えたのは75.1%であり、4人中3人は理想の水泳授業を行うことができていないという結果であった。また、「いいえ」と答えた教員の理由から、水泳授業の課題がいくつか明らかになった。特に多く見られたのが、「児童の数が多く、個に応じた指導ができない」という理由であった。さらに、「水泳の特殊性」から、「多様な授業展開がしづらい」や「思考力を働かせる場面を作るのが難しい」といったような理由も見られた。一方、「学び合いをさせたいが、能力別指導になってしまう」等の意見も見られることから、教員自身が実践したい指導法を思い描いてはいるが、水泳授業の

難しさ・課題から実行することができないという問題も明らかになった。

表7 理想の水泳授業を実現できているか

はい	いいえ	無回答
23.7%	75.1%	1.2%

4.2.3. 水泳授業の内容について

「水泳授業の内容」(表8参照)は複数回答項目である。最も割合が高かったのは「泳法指導」の49.7%であった。この結果は、先行研究で指摘されていた「競泳に偏った水泳授業」を顕著に表した結果であった。さらに、後述のように「学校独自のカリキュラム」がある学校とない学校では、「水泳授業の内容」に違いがあることも明らかになった。

表8 水泳授業の内容

内容	割合
泳法(クロール・平泳ぎ)	49.7%
浮く・もぐる等の初歩的指導	47.9%
水遊び	43.2%
長く・速く泳ぐための指導	20.7%
水中運動(アクアビクス等)	11.2%
その他	1.8%

「独自のカリキュラムがある学校の水泳授業の内容」は表9のとおりである。「泳法指導」が圧倒的に高い結果(77.8%)となった。一方で、「独自のカリキュラムがない学校の水泳授業の内容」では、「泳法指導」が46.4%と「独自のカリキュラムがある学校」よりも大幅に低い結果であったことから、独自のカリキュラムをもつ学校では、より「泳法指導」に傾斜した内容の授業を行っていることが明らかになった。このことから、水泳検定級など「学校独自のカリキュラム」を設定して、水泳学習に比較的熱心に取り組んでいると思われる学校ほど、低・中学年から「泳法指導」が行われる可能性が高いということが示唆された。

表9 学校独自カリキュラムの有無と水泳授業の内容

内容	学校独自のカリキュラム	
	ある	ない
泳法(クロール・平泳ぎ)	77.8%	46.4%
浮く・もぐる等の初歩的指導	33.3%	49.7%
水遊び	27.8%	45.0%
長く・速く泳ぐための指導	22.2%	20.5%
水中運動(アクアビクス等)	11.1%	11.3%
その他	5.6%	1.3%

4.2.4. 水泳授業の方法について

「水泳授業の方法」は、教員が水泳授業内で行った「具体的な授業実践(表10参照)」を尋ねた。この質問項目は複数回答項目である。選択肢は、学習指導要領

の例示や先行研究の内容等を参考に作成した。結果としては「水中ジャンケン」等の基本的な水遊びの実践が全学年で多く見られた。また、実践研究でも多く見られる「ドル平」は42.0%と比較的高い結果を示した。

先行研究において指摘されていた「多種多様な水泳種目を取り扱うことによる生涯スポーツを志向する水泳授業の実践」について、例えば「水中運動(エアロビクス等)」の割合(13.6%)があまり高くはないことから、先述した授業の目標設定と同様に、生涯スポーツを意識した授業実践があまり多くないことも示唆された。

表10 具体的な授業実践

授業実践	割合
水中ジャンケン	77.5%
面かぶりクロール・平泳ぎ	75.1%
輪くぐり・股くぐり	72.8%
補助具を使ったストロークの練習	71.0%
バタ足・かえる足	68.0%
バブリングやポビング	60.9%
水かけっこ	57.4%
距離泳	52.1%
ドル平泳法	42.0%
伏し浮き・背浮き・くらげ浮き	39.1%
タイム泳	27.8%
リレー遊び(泳ぎ)	27.8%
電車ごっこ	27.2%
石拾い	24.3%
動物ものまね	18.9%
水中運動(エアロビクス等)	13.6%
け伸び	8.9%
背泳ぎ	6.5%
その他	1.8%

4.2.5. 水泳授業の評価について

水泳授業の評価の方法についての結果は表11-1のとおりである。この項目は、複数回答項目である。最も高い割合を示したのは「授業中の態度・学びに向かう力による評価」の76.3%であった。次いで「可泳距離による評価」が75.1%と高い結果となった。また、先行研究において、学習指導要領には明記されていない「タイム(速さ)での評価」が行われているのではないかと指摘されていた課題については、ここでは9.5%という結果を示し、割合は低いながらも、学校現場における実態が明らかとなった。

さらに、学年別でみた評価の方法について結果を示したのが表11-2である。低学年では、最も高い割合を示したのは「授業中の態度・学びに向かう力による評価」の85.7%であった。次いで「可泳距離による評価」が44.9%という結果を示した。この2つの評価項目において大きな差がついた要因としては、低学年では、

まだ泳力に大きな差が出るような授業内容を実施していないことなどが考えられる。

表11-1 評価の方法(全体)

評価の方法	割合
授業中の態度・学びに向かう力による評価	76.3%
可泳距離による評価	75.1%
フォームの完成度	30.2%
課題解決に向かうための思考力・判断力による評価	26.6%
タイム(速さ)による評価	9.5%
その他	3.0%
筆記テストによる評価	1.8%

中学年では、最も高い割合を示したのは「可泳距離による評価」の100%であった。すなわち、中学年を担当する教員は全員「可泳距離による評価」を行っていることが明らかになった。次いで、「授業中の態度・学びに向かう力による評価」が68.8%と高い結果となった。また、「可泳距離による評価」が多く行われているという点から、中学年からの「泳法指導」が行われているという課題があらためて浮き彫りとなった。

高学年では、最も高い割合を示したのは「可泳距離による評価」の82.0%であった。次いで「授業中の態度・学びに向かう力による評価」が74.0%と高い結果となった。これより、「可泳距離による評価」は中学年よりも低い結果となり、また、二番目に高い割合を示した評価項目との差が、中学年の方が大きかったことから、中学年の方が、より「可泳距離による評価」を重視しているということも明らかになった。

表11-2 評価の方法(学年別)

評価の方法	学年別		
	低学年	中学年	高学年
授業中の態度・学びに向かう力	85.7%	68.8%	74.0%
可泳距離	44.9%	100%	82.0%
フォームの完成度	14.3%	33.3%	46.0%
思考力・判断力	20.4%	33.3%	18.0%
タイム(速さ)	4.1%	10.4%	14.0%
その他	6.1%	4.2%	0.0%
筆記テスト	2.0%	4.2%	0.0%

4.2.6. 泳法の指導について

「どの泳法を最初に指導しますか」という質問に対する回答の結果は表12-1のとおりである。「クロール」が93.4%と最も高い割合を示した。次いで「平泳ぎ」が5.4%という結果となった。ただし、学習指導要領においては、「クロールと平泳ぎの指導順序」については明記されていない。「クロール」が圧倒的に高い割合を示したことについては、次の「泳法指導におけるキック・ストローク・呼吸の指導順序」との関連で後述する。

表12-1 最初に指導する泳法

泳法	割合
クロール	93.4%
平泳ぎ	5.4%
背泳ぎ	0.6%
バタフライ	0.6%

「泳法指導におけるキック・ストローク・呼吸の指導順序」の結果を示したのが表12-2である。最も多い割合を示したのは「キック→ストローク→呼吸」の58.7%であった。次いで、「キック→呼吸→ストローク」が17.4%と高い割合を示し、最初に指導するのは「キック」が最も多いことが分かった。また、先行研究においては、「呼吸をしながらの初歩的な泳ぎ」という指導法が紹介されており、「呼吸」を最初に指導するといった内容である。その「呼吸」を最初に指導する「呼吸→キック→ストローク」も14.4%と3番目に高い割合を示した。このような結果から、先行研究では様々な指導順序が紹介されているが、現場の水泳授業では「キック」を最初に指導する「キック→ストローク→呼吸」という順序が最も多く行われていることが分かった。

泳法指導の順序については先行研究においても、「け伸び→ばた足」という指導順序が多く紹介され、「キック」を最初に指導するという上記の結果と一致する。これらのことから、「ばた足」と関連して、「け伸び→ばた足→面かぶりクロール」という順序で指導する教員が多いことから、先述したように「クロール」を最初に指導する教員が多いこととの関連が推測できる。

表12-2 キック・ストローク・呼吸の指導順序

指導順	割合
キック → ストローク → 呼吸	58.7%
キック → 呼吸 → ストローク	17.4%
ストローク → キック → 呼吸	3.6%
ストローク → 呼吸 → キック	1.2%
呼吸 → ストローク → キック	4.8%
呼吸 → キック → ストローク	14.4%

「クロールの指導の際の主な課題(子どものつまづき)」の結果については表12-3のとおりである。「その他」においては、「腕と脚をかくタイミング」や「体の力を抜いて浮くこと」、「3つの動き(息継ぎ・腕・脚の各動作)を同時に行う難しさ」などの回答が見られた。最も多い割合を示したのは「息継ぎ」の81.7%であった。それ以外の選択肢は10%未満と低く、「息継ぎ」が圧倒的に高い結果となった。この結果については、先行研究においても「クロールの指導上の主な課題」は、顔を横向きにして行う「息継ぎ」にあるとされており、同様の結果が確認された。

表12-3 クロール指導の際の主な課題
(子どものつまづき)

指導上の課題	割合
息継ぎ	81.7%
腕の動作	6.7%
脚の動作	6.7%
その他	4.9%

「平泳ぎの指導の際の主な課題(子どものつまづき)」の結果については表12-4のとおりである。「その他」においては、「腕と脚の連動」や「息継ぎのタイミング脚との連動」などの回答が見られた。最も多い割合を示したのは「脚の動作」の69.1%であった。次いで「息継ぎ」が16.0%という結果となった。この結果についても、先行研究において「平泳ぎの主な指導上の課題」は「脚の動作」による推進力不足であるとされており、同様の結果が確認された。

表12-4 平泳ぎ指導の際の主な課題
(子どものつまづき)

指導上の課題	割合
息継ぎ	16.0%
腕の動作	5.6%
脚の動作	69.1%
その他	9.3%

「子どもが溺れる主な原因」の結果については表12-5のとおりである。最も高い割合を示したのは「水に対する恐怖心」の48.2%であった。次いで、「息継ぎができないから」が24.4%という結果であった。

表12-5 子どもが溺れる原因として考えられること

考えられる原因	割合
推進力不足	6.0%
息継ぎができないから	24.4%
水に対する恐怖心	48.2%
泳ぎ方が分からないから	13.7%
無回答	7.7%

このことから、「子どもが溺れる原因」は1つではなく、様々な原因から溺れてしまうということや、子どもによって溺れる原因は異なるという意見があることも明らかになった。一方で、先行研究においては、「息継ぎができない」ことが「子どもの溺れる主因」とされており、この結果とは異なるものであった。このことについては、「溺れる原因」と「泳げない原因」を混同して捉えている可能性があることから、「泳げない原因」は「水に対する恐怖心」にあると回答する教員が多くなったことが考えられる。

4.2.7. 水泳授業に対する教員の意識について

「指導力に自信がある」という質問に対する回答の結果は表13-1のとおりである。

表13-1 自分の指導力に自信がある

そう思わない	あまり そう思わない	ややそう思う	そう思う
7.1%	56.0%	33.9%	3.0%

最も高い割合を示したのは、「あまりそう思わない」の56.0%であった。また、「そう思わない」と回答した教員も7.1%という結果を示し、「指導力に自信のない教員」が60%以上も存在するという結果となった。このことから、水泳授業の難しさが明らかになった。「指導力に対する自信」と「教員の泳力」に関係があることが考えられるが、今回の調査では明らかにすることができなかった。

「教員一人で教える場合の児童数は少ない方がよい」という質問に対する回答の結果は表13-2のとおりである。最も高い割合を示したのは、「そう思う」の83.2%であった。「ややそう思う」についても16.2%を示していることから、大部分の教員が水泳授業においては、できるだけ指導する児童数は少ない方がよいと感じていることがわかった。

表13-2 一人で教える場合の児童数は少ない方がよい

そう思わない	あまり そう思わない	ややそう思う	そう思う
0.6%	0.0%	16.2%	83.2%

5. まとめ

泳げるようになるということは水泳授業の技能的な目標として大きな柱になることには違いないが、重要なことは児童が水泳の楽しさ・泳ぐことの楽しさを体感することである。文部科学省ウェブサイトには、水泳の「楽しさや喜びを味わうためには、水遊び(低学年)などで水に慣れ親しむことや、水に浮く・泳ぐ(中学年)などの経験を十分にしておくことが必要です。その上で、高学年では泳ぎのポイントをていねいに指導することが大切です。」と明示されている。子どもが泳げるようになるためには、必ずしも早い段階から泳法指導を行えばよいという訳ではなく、あくまで段階的指導の重要性が示唆されているのである。

以上のことから、水泳授業の特殊性という要因から様々な課題があることが明らかになった。それらの課題に対して、早い段階から泳法指導を行うという授業を展開するのではなく、泳ぐことの楽しさを味わうために、段階に合わせた授業を行うことが重要であるといえる。

本研究の成果を学校現場に還元するとすれば、小学校低・中学年で「泳法の前段階の基礎・基本」を習得

した児童は、高学年・中学校において泳法を習得し、自らの記録に挑戦したり、多様な水泳種目においてその学びをさらに深めたりすることにより、「水泳の楽しさ」を味わうことができると考える。

主要引用・参考文献

- 荒木豊(1995)「水泳のドル平泳法を基礎泳法とした系統的技術指導」山梨大学教育学部研究報告(46):103-110.
- 土居陽治郎・下永田修二(2009)「学校プール建設の歴史と学校体育における水泳教育の変遷」国際武道大学紀要(25):39.
- 浜上洋平・橘川未歩・澤村省逸・清水茂幸・清水将(2015)「泳ぎの習熟度からみる背泳ぎとクロールの学習指導の順序性に関する検討」岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要(14):211-217.
- 浜上洋平(2017)「水泳だからこそできる「主体的・対話的で深い学び」を求めて」体育科教育(65)8:21.
- 本間三和子(2011)「小学校低中学年期で経験すべき「動き」を問い直す」体育科教育(59)7:14.
- 鎌倉正和(2016)「児童の主体的な学びを引き出す水泳授業を目指して—第4学年水球風ゲームを取り入れた実践を通して—」教育実践研究(26):157-162.
- 牧野満(2011)「これじゃダメだよ!水泳授業—4つの落とし穴」体育科教育(59)7:22.
- 松原匠・長見真(2014)「戦後学校体育における水泳授業に関する研究—生涯スポーツを志向する水泳授業を視点として—」仙台大学大学院スポーツ科学研究科修士論文集(15).
- 松井敦典(2011)「命を守る『安全水泳』の視点から水泳教育を問い直す」体育科教育(59)7:18.
- 松井敦典(2017)「『安全確保につながる運動』の授業を構想する」体育科教育(65)8:27.
- 三輪千子・本間三和子(2010)「小学校低学年に身につけておくべき水中での基本動作の達成度と陸上での運動遊びとの関係」体育科教育研究(26)1:1-13.
- 三輪千子(2011)「低中学年の授業で保証すべき基礎基本」体育科教育(59)7:30-33.
- 文部科学省ウェブサイト:(最終検索日:2019年10月10日)
[http://www.mext.go.jp/component/a_menu/sports/detail/_icsFiles/fieldfile/2011/07/06/1308040_09.pdf]
- 成家篤史・鈴木直樹・寺坂民明(2013)「『感覚的アプローチ』による水泳学習の実践提案」体育科教育研究(29)2:11-23.
- 大場昌昭(2016)「水泳の授業でいま何がどう問題か」体育科教育(64)7:12-15.
- 佐藤悠太郎・鈴木聡(2018)「小学校教員が捉える水泳の学習内容に関する研究—学校水泳で目指される2つの方向性との関係に着目して—」日本体育学会第69回大会発表資料.
- 柴田義晴(2004)「画一的な指導法を見直そう—諸外国の水泳指導をヒントに—」体育科教育(52)7:20-23.
- 篠原健真(2016)「安全水泳からはじまる授業を構想する」体育科教育(64)7:36.
- 鈴木一成(2016)「協同的な学びを促す『牽引練習法』」体育科教育(64)7:40.
- 田邊圭子・永山亮一(2015)「体育科教育に関する一考察—泳ぐだけではない水泳授業実践—」北陸学院大学・北陸学院大学短期大学部研究紀要(8):85-91.
- 寺本圭輔・家崎仁成・古田理郁・平野雅巳・村松愛梨奈・三浦唯・瀧本歩(2017)「小学校授業の現状と児童および教員の意識に関する検討」教科開発学論集(5):83-90.
- 椿本昇三(2004)「水泳授業の役割と今求められるもの—文部科学省「水泳指導の手引改訂版」から—」体育科教育(52)7:10-13.
- 吉松英樹(2011)「小学校低学年からの水泳の授業を変える視点と3つの切り口」体育科教育(59)7:26-29.